

子どもたちの装い

—十七世紀オランダの親たちの鏡像—

小林 頼子

子どもの成長は速く、同じサイズの服が着られる期間は短い。だから、妹や弟が姉や兄のお下がりを着たり、年齢の近い近隣の子どもの間で服が交換されたりもする。幼い時分に、だれもが一度ならず経験した子ども服のリサイクルである。かくして、子どもの服は、とりわけ「もの」が貴重な社会では、使い回しが激しくなり、大人服に比べ、資料として後世に残ることが少なくなる。往時の子ども服の様子を探る際、絵画の資料的価値がきわめて高くなる所以である。もちろん、画家のまま

ざしは常に社会化されており、たとえ写實的に描かれた作品といえども、当時のありのままを伝えるわけではない。それでも、写実性に秀でた絵画を多数生み出した十七世紀オランダに関しては、慎重に腑分けをすれば、子ども服の実態を比較的正確に把握できる状況にある。そこで、以下、ごく簡略に十七世紀オランダの子どもの装いを成長に合わせてたどってみることにしたい¹⁾。

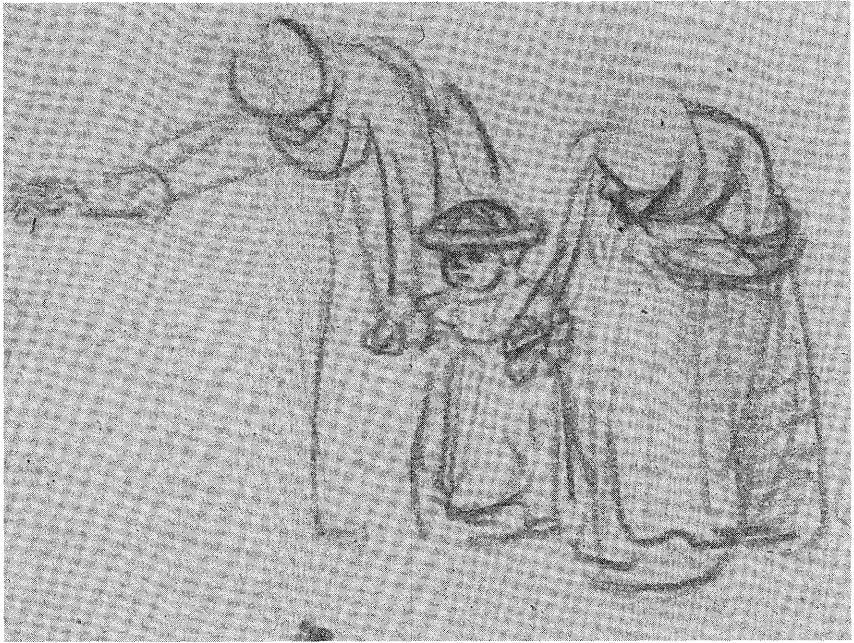
乳児期については、十七世紀オランダを代表する画



- 1 (左) レンブラント《ベッドの母と子》、素描、1635—36頃、ロンドン、コートールド研究所
- 2 (右) レンブラント《立つ練習》、素描、1635—37頃、ロンドン、大英博物館

家、レンブラント・ファン・レイン(1606—1669)²⁾が一六三〇年代に描いた三点の素描を参考にしよう。³⁾一点には、ベッドに座る女性とその胸に抱かれた幼児のいる情景が描かれている(図1)。一六三三年六月にレンブラントと結婚した妻サスキアは、病弱な女性で、床に伏すことが多く、早くも一六四二年六月に二十九歳の若さで亡くなった。一六三五年、三八年、四〇年、四一年にもうけた四人の子どもも、第一子は二か月、第二、三子は二週間で早世し、成人したのは亡くなる九か月前に生まれた第四子のテイトウス³⁾だけだった。図1は様式的に一六三五一六年頃の制作と推定されるので、ちょうど第一子が誕生した頃の作品になる。⁴⁾

帽子をかぶり、ケープに包まれた子どもは、よく見ると、首から下をすっぽりとおくるみで包まれている。当時の医学書は、生まれたばかりの乳児は、ヘソ布とおしめをし、おくるみにくるむよう勧めている。⁵⁾ミイラのよう
に布でグルグル巻きにされるなんて、乳児にははなはだ難儀なことに違いないが、オランダは寒い国だから、



3 レンブラント《歩く練習》、素描、1635—37頃、ロンドン、大英博物館

風邪を引かさない配慮が必要だった。さらに、奇形を予防したいという親の願いも強かった。まっすぐに背筋の伸びた姿勢は、とりわけ中・上流社会に生きようとする者には欠かせない身体的要件だった⁶⁾。だからくだんの医学書には、脚の間にオムツを入れてはならない、といった細かい指示も併せて記されている。

乳児の骨格がしっかりしてくるにしたいが、まずは両手が、続いて生後三か月を過ぎる頃には脚がおくるみから解放される。そして手足が自由に動かせるようになれば、やがて、立つ練習、そして歩行器や大人の手を借りての歩く練習が始まる。レンブラントには、ちょうどその頃の幼児の姿を描いたステキな素描もある(図2、3)。どちらも制作されたのは一六三五—三七年頃。三五年に生まれた第一子が生後二か月、つまり立つことはおろか歩くことさえなく逝ったことを思えば、素描の飾りのない日常性がかえって胸を打つ。

両の手首を大人に掴まれて、おぼつかないながらもバランスをとり、一歩一歩、脚を前に踏み出そうとする幼

児(図3)。両側の女性は、ほら、もう一步、こわくないよ、と幼児を励まし、元気づけているかのようだ。幼児は、右側に立つ女性の手が示す方向をまっすぐに見つめている。真一文字に結んだ口元からは、「自立」に向けてのやみがたい意思が感じとれる。とはいえ、歩き始めの幼児は、転んで怪我をする危険にいつだってさらされている。そこで、頭部には、万が一の転倒のショックをやわらげる分厚い鉢巻のようなものが巻かれている。着衣の方は、レンブラントの赤チヨークの簡略なタッチからは必ずしも判然としないが、どうやら、長袖の上着に前垂れ、長いスカートにエプロンを重ねているようだ。この幼児が男か女かは判別できない。当時にあつては、一定の年齢に達するまで男女ともスカートを着用したからだ。

それでも、ほかの徴から、スカートをはいた幼児の性別を判断できることもある。たとえばファン・ラーフェステイン(1572頃—1637)の描いた幼児は、間違いなく男児である(図4)。鍔つばつきの帽子はもっぱら男児のかぶ

るものだったからだ。すでに転ぶおそ懼れもなくなるほどに成長し、鉢巻を鍔つばつき帽子に替えたのであろう。依然としてスカートをはいているが、共ぎれの胴着たねぎともども、白地に黒の植物パターンをあしらった布地か、何ともシックで、美しい。その装いは、幾層にも重なる襟のレース、袖口の折り返しおひがしのレース、両腕のプレスレット、斜めがけにした金のメダルとあいまつて、親の豊かな暮らしぶりを彷彿とさせる。肩から下がる帯状の布は、歩行するときに転ばぬように大人に引張ってもらう肩紐である。ただし、図4の場合は、子ども服のファッションとして定着した一種の装飾であり、実用性はない。折り跡がくつきりくつきりとついたレースの縁飾りつきエプロンも同様で、記念的色彩の強い肖像画であること考えれば、むしろ美しい装飾と見るべきだろう。⁷⁾

服飾からは離れるが、ラーフェステインの肖像画には興味深い細部がほかにもある。まずは傍らの椅子の上の大鼓と撥と木馬。遊びは、子どもの無辜むこのしるしであり、体をつくり、社会性を学ぶ機会として、繰り返し推

奨されていた。子どもが手にするゴルフのステイックとボールも、子どもの遊びの一つであった。⁸⁾ただし、ここに描かれたゴルフの道具は、幼児の右手がボールに差し向けられているところから見て、単なる遊びの示唆に終わるものではなく、おそらくは、幼児が将来身につけるべき「恒心」を示唆していると思われる。⁹⁾傍らの椅子の腕木に止まるオウムは、人の言葉を真似るところから、子どもの学びの重要性を強調し、幼児の足もとに行儀よく座るイヌは、彼の遊び友だちであるとともに、彼の良きしつけの証しとして描きこまれている。¹⁰⁾

男児が、いつごろ、スカートからズボンにはきかえるか、正確なところはわからないが、推測のための資料がないわけではない。十七世紀オランダきつての知識人クリステイアーン・ハイヘンスは、一六三七年の日記に、妻の喪があけたのを機に、二人の息子にズボンをはかせることにしたと書いている。¹¹⁾ときに息子は八歳と六歳。この年頃が一つの目処ということなのだろう。一六五三年の記録だが、新調の男児子ども服は、胴着・ズボンそ

ろいで四十七ギルダーだった。¹²⁾当時の単純労働者の年収の四分の一ほどだから、安い買い物ではない。できあがった服は、おそらくは、ファン・フリート(1611頃—1675)が描いているような、胸前にボタンが並び、やや胸上に切り替えの入った上着、膝あたりで絞ったズボン、それにレースの襟と袖口、長靴下といったとりあわせだったろう(図5)。

同じファン・フリートの作品から、女兒の場合も観察しておこう。面白いことに、最も若い女兒の白地に黒のパターンをあしらった服、エプロン、肩紐は、ラーフェステインの描く男児のものと共通する。しかし、頭巾や首飾りを身につけ、そして何よりも母親の傍らにいるので、こちらは間違いなく女兒である。成長した後の服装は、右端に立つ二人の少女のように、胸前にボタン、やや胸上に切り替えの入った胴着、長いスカート、レースの襟と袖口といったパターンもあれば、切り替えがウエストのあたりに下がり、スカートを二枚はき、上のスカートを膝前くらいで折り上げて、下のスカートを見せ



- 4 (上左) ラーフェステイン 《ある男児の肖像》、1628、個人蔵
- 5 (上右) ファン・フリート 《ミヒール・ファン・デル・デュッセン一家の肖像》、1640、デルフト、市立プリンセンホフ美術館
- 6 (中左) ヤン・ステーン 《デルフト市長とその娘の肖像》(部分)、1655、個人蔵
- 7 (中中央) フェルスブロンク 《ある婦人の肖像》、1640、エンスヘーデ、トウエンテ国立美術館
- 8 (中右) フェルスブロンク 《ある少女の肖像》、1641、アムステルダム、国立美術館
- 9 (下左) デ・ウィット 《デルフトの新教会のウィレム沈黙公の墓》(部分)、1656、リール美術館

る場合もある(図6)。ちなみに、十七世紀半ばが過ぎると、短いちょうちん袖の下から、レースの袖が見えるスタイルが流行してくる。¹³⁾

一般に、子どもの服には、大人の服の流行がそのままに反映する。というより、子どもの特性を考慮した子ども服など存在しなかった、大人服のミニチュア版が子ども服だった、と言ったほうが正確だろう。ただし、先にも触れたエプロンと肩紐は、子ども服特有のもので、実用と装飾を兼ねていた。また、子どもの服が大人の服に比べ、カラフルだったことも大きな違いである。十七世紀オランダでは、華美な服装に対するタブーの念が根強く働いていた。教会当局(プロテスタント)も知識人たちも、幾度にもわたり、華美な服装を戒める声を上げて¹⁴⁾いる。未曾有の繁栄を謳歌していた時期にあつて、成功者たちが手に入れた富を装いに惜しみなく注ぎ、それがときに目に余るほどの贅沢となつたのである。そうした状況下で、大人、とくに女性たちは、黒の服を身に付け、謹厳さを装つた。とはいえ、その生地は見るからに

高価で、袖口と襟元には凝つたレースをまとい、胸前には金糸をあしらひ、シックな帯やリボンや手袋や扇子を何げ気なくしのばせ、真珠や宝飾品で頸・耳・首・胸前・指・腕を控えめに飾るなど、贅沢なおしゃれは隠れもない。一方子どもたちは、親たちの欲望をストレートに反映し、惜しみなく華やかな装いに身を包んだ。

フェルスプロンク(1606/09—1622)の描く夫婦の肖像と、彼らの娘の肖像は、そこら辺の事情をきわめてよく体現している。一六四〇年、画家はいまでは身元不詳になつた夫婦の肖像画を制作した。ここでは、比較のために妻の方に注目するが(図7)、彼女は、白いブラウスの上に富裕層の女性のならいで深々とした黒の服をまとい、肩襟の上に四角い布を対角線上に折り重ねたレース襟をかけ、胸前には寶石をあしらつたりリボンをつけ、やや胸上にレースのバンドを結び、襟と同じ素材のレースで袖口を飾り、そして真珠のアクセサリー(涙型のネックレス、髪飾り、三連のネックレス、五連のプレスレット)と指輪をつけ、右手に羽の扇を持ってポーズし

ている。ずいぶんと贅沢に着飾っているのだが、何せ基調が黒なので、像主の女性からはシックで落ち着いた雰囲が漂う。一方、一年後に描かれた彼女の娘の方はどうだろう（図8）。いささかの異同はあるものの、ほぼ同じようなポーズと装いで画家の前に立っている。ただし、服の色が薄い水色に変わり、金糸の刺繍がふんだん用いられ、おまけに背景も明るく処理されているため、華やかさが一段と際立つ。上記のように少年の服が五十七ギルダ弱だったとすれば、六歳から八歳くらいと推定されるこの少女の装いには倍以上の大枚が払われたのではないか。

子ども服に費やされる額の大きさは、十七世紀当時からモラリストたちの批判を引き起こしていた。聖職者のウイレム・テーリング（1579—1629）は、多くの親たちが子どもに美しい服を着せることにこだわる、「あなた方は、子どもたちを、あなた方の子ども時代にそうであつたよりも三倍も高価に着飾らせている。それを好む子どもたちは、大人になると、自分の子どもにさらに贅

沢な服を着せるだろう。そして虚飾とむなしさが海のようになだれ込んでくる」、「子どもたちは、最上の服を着込んでいると、近寄りがたくなり、悲しむべきことに、近隣の普通の服装の子どもたちに対して横柄になり、怒りっぽくなり、さもなければ、遊ぼうとしていた彼らをほとんど尊重しようとしなくなる」と、贅沢な装いが見境なくエスカレートし、子どもたちの心を蝕みかねない危険を指摘した。¹⁵⁾十七世紀にオランダを訪ねた旅行者の多くは、子どもが甘やかされていることに驚きの声を上げていた。¹⁶⁾絵画に見られる子ども服の選択は、そうした声が単なる誇張でないことを教えてくれる。子ども服には大人の生活意識が如実に映し出されているのである。

最後に、親が子どもの服にかまっていられないケース、つまり経済的に余裕のない家庭の子どもにも目を向けておこう。基本的に、男児は白のシャツに胴着とズボンと帽子、女児は白のブラウスに胴着とスカートと頭巾、そして実用のエプロンというのが定番である（図9）。素材の質が格段に落ち、しかもくたびれ果ててい

る、レースなどの贅沢な装飾もなければ必要のない重ね着もしないといった点を除けば、あくまで筆者が目を通した絵画に基づいての判断だが、富裕層と貧困層の子どもの装いの形にさほど大きな差は見られない。形ではなく、贅沢さの度合いで、富裕層は貧困層と自らを差別化していたということだろう。このことは、十七世紀オランダ社会が、他国に先駆けて、出自ではなく、金銭を最重要尺度とする資本主義社会を形成していたことと無縁ではなからう。もちろん、貧しい子どもの服は、どこかが破け、裾がぼろぼろになっていることが多い。子ども服は、子どもの成長にあわせて作り直し、擦り切れるまで繰り返し利用されるのが常だったからだ。十七世紀には古着市場が活発に機能していた。¹⁸⁾だから、着古されたものは、持てる層から持たざる層へと、富の階段を下るように使いまわされたのである。

子どもは、物心ついたときには、すでに親の選択したものに囲まれて暮らしている。事のよしあしから始まっ

て、言葉、行動範囲、交友関係、教育、食べ物、髪型、服装など、すべてが、子ども自らが何らかの判断を下し、意思を表明する前に親から与えられ、子どもの世界観の形成に重要な影を落とす。子どもの中には、自らの才能と行動力と判断力でやがて独自の道を切り開き、親とは全く異なる世界に入り込んでいく者もあるが、階級構造が安定している社会では、親の築いた世界の外に出るのとはなかなかにむずかしい。中でも親の意思が、気づかぬうちに子どもの理性・感性の両面にわたって浸みわたってしまうのが服装であろう。第二の皮膚といわれる服は、防寒や保護という実際的な役割を超えて、形や色や素材を通じて、他者とのかわりを意識化させ、社会的自我の目覚めを促し、着る者の感性を育てる重要なきっかけになるからだ。大人服なら抑制されたものが、子ども服だからこそ顔を出すこともある。子ども服は、十七世紀オランダ社会を構成する大人たちを映し出す優れた鏡の役割を果しているのである。

(目白大学)

註

- 1) 以下は、一六三〇年頃—一六〇年頃の子どもの服装を絵画のなかに探る試みであるが紙数の関係もあり、時、場、役割りによって大きく変化する装いの逐一は必ずしも厳密に追跡していない。
- 2) レンブラントは、特に一六三〇年代と四〇年代に素描、エッチングで乳児、幼児をモチーフとした作品を制作している。詳細については展覧会図録 *Rembrandt's Women*, National Gallery of Scotland, Edinburgh, 2001 et al., pp. 129-141, 190-192 を参照されたい。
- 3) レンブラントに関する古文獻については W. L. Strauss et al., *The Rembrandt Documents*, New York, 1979 を参照されたい。
- 4) 子どもをモチーフとしたレンブラントの素描、エッチングが、実景か、構想か、自身の子どもの姿なのかについては種々の議論がある。詳細は註2に挙げた文献を参照されたい。
- 5) S. Kuus, 'Kinderen op hun moost. Kinderkleding in de zeventiende eeuw', in *Kinderen op hun moost* (exh. cat.), p. 76 による。なお、以下の子ども服に関する情報の多くは、同論文を参考にしている。
- 6) 小林頼子『フェルメールの世界』、NHK出版、一九九九、157—158頁を参照されたい。
- 7) 詳細は註4に挙げた Kuus 論文の 76—81頁を参照されたい。
- 8) コルフは、現在のゴルフの原型に当たる遊戯である。十七世

- 紀には、子どもも大人も楽しんでいた。コルフの発祥、ゴルフへの展開については、展覧会図録 *Pieter de Hooch 1629-1684*, Dulwich Picture Gallery, 1998 et al., p. 136 を参照されたい。
- 9) コルフが美德の一つ「恒心」と結びつく根拠についてはエディ・デ・ヨンク『オランダ絵画のイコノロジー』、NHK出版、二〇〇五（小林頼子ほか訳）、229—230頁を参照されたい。
 - 10) 犬と子どものしつけの関係については、註5に挙げた展覧会図録に J. B. Bedaux が寄せた序章の 19—22頁を参照されたい。
 - 11) 註5に挙げた Kuus 論文の 81頁を参照されたい。
 - 12) *Idem*.
 - 13) ちようちん袖の例はヤン・アルベルツォン・トティウスが 1663年に制作した《四歳の少女の肖像》（オンタリオ美術館、トロント）などに見られる。
 - 14) 小林頼子『フェルメールの世界』（註6参照）、156頁を参照されたい。
 - 15) 註5に挙げた Kuus 論文の 73頁を参照されたい。
 - 16) S. Schama, *The Embarrassment of Riches. An Interpretation of Dutch Culture in the Golden Age*, London, 1987, p. 485
 - 17) 註5に挙げた Kuus 論文の 75頁を参照されたい。
 - 18) 展覧会図録 *Street Scenes: Leonard Bramer's Drawings of 17th-century Dutch Daily Life*, Holstra Museum, New York, p. 69 を参照されたい。